難治性 精巣腫瘍闘病記

精巣腫瘍患者友の会 J-TAG　代表　改發 厚

精巣腫瘍の特徴

精巣腫瘍は非常に稀ながんで、罹患数は年間1200人、10万人に1～2人ぐらいです。がんになる前は「がん＝死」というイメージがありましたが、精巣腫瘍は治療をすれば、7～8割は治ると言われています。標準的な治療としては、原発の睾丸を取り去り、長期の化学療法（BEP療法）をやって、自宅療法も含めると約半年かかります。前立腺がんと違い、若い世代がかかりやすく、20代から40代が好発年齢です。

私の闘病記

睾丸が卵大に腫れてきたのですが、当時まだ32歳。泌尿器科に行くことにためらいがあり、痛くもないので放っておいたんですね。するとミカン大になり、さすがにこれはということで病院へ行きました。2004年5月に睾丸を切除、精巣腫瘍と告げられました。ほとんどの人は半年で治るのですが、私の場合は、がんは睾丸にとどまらず、リンパ節まで転移していました。抗がん剤治療で、リンパ節の腫瘍が小さくなったので、それを手術で取り除きました。ところががんはそこだけでなく、肺にも多発転移していたのです。もうここでは処置できず、大学病院へ転院することになりました。この段階で「難治性精巣腫瘍」になったわけです。そこでは超大量、通常の5倍の抗がん剤を投与するということになりました。後述する激しい副作用を経て、高かった腫瘍マーカーは陰性化し、後は肺に残った腫瘍を取り除いたら終わるはずだったのですが、ここで再び数値が上がってしまいました。腫瘍マーカーの値が正常に戻らないと、手術は出来ないのです。治る可能性は薄かったのですが、試験的に他の抗がん剤を試しました。 MEA療法という方法です。幸いなことにこれが効いて数値が正常に戻り、やっと肺の手術が出来ました。2005年の9月にがんは寛解し、長かったほぼ１年半の治療生活がこれで終わりました。

抗がん剤の副作用

初めのBEP療法のときは、吐き気・嘔吐、脱毛から始まり、骨髄抑制がありました。骨髄では白血球・赤血球等の血液の成分を作っています。抗がん剤はこれらにもダメージを与えるので、たとえば白血球が減少すると免疫力が低下します。そのため個室に入り外気から隔離されます。その他末梢神経や聴力・味覚等に障害が出ます。しかしその後の超大量化学療法のときは、5倍の抗がん剤にふさわしい副作用がありました。吐き気や激痛、思考の凶暴化、壮絶な治療でした。その甲斐あってか一時は腫瘍マーカーは陰性化しましたが、その後また再発。次のMEA療法では、副作用として口内炎が発生、口の中が血だらけになった様な痛さが一週間続きました。

治療以外の諸問題

治療や副作用の辛さ以外に、男性がん患者にとっては直面する困難が多々あります。精巣が片方残っても抗がん剤の影響やリンパ節郭清の二次障害等で、妊孕性（子作り）が問題になりやすいこと。長期休業すれば、医療費のこと、今後の生活費のことなど経済的な不安が重く圧し掛かってきます。子供の教育のこと、家族や親のこと、自分一人では解決できない問題がたくさんありました。退院したからといって、これで解決したわけではなく、元の会社や部署に戻れる保証もありません。たとえ復帰できたとしても再発の不安や就労に耐えられるかどうかという問題もあります。

患者会とサポートについて

私が復帰出来たのも、励ましてくださった仲間と沢山のサポートのおかげです。今後も「精巣腫瘍患者友の会」での活動を通し、多くの患者さんたちのお役にたっていきたいと思っています。（要約：鈴木武）